

# 社会教育委員の会提言書

## 「つながる奥出雲」

～人づくり、地域づくりによる持続可能な町づくり～

2019年3月12日提出

奥出雲町社会教育委員の会

## 目次

1	はじめに	1
2	社会教育委員から見て、奥出雲町を持続する上で問題とを感じる状況・・・	2
	(1) 子供の状況	
	(2) 家庭の状況	
	(3) 地域の状況	
3	持続可能な奥出雲町のために	3
	「こころの中に奥出雲があり、つながり続ける人」	
	(1) つながりを大切にし、地域を担う大人	
	(2) 奥出雲町が大好きな子供	
	「つながりを生かした人づくりの推進	5
	(1) 奥出雲のひと・もの・ことにふれる機会の充実	
	(2) 住民同士が集う場の拡充	
	(3) 「参加」から「参画」への転換	
	(4) 家庭教育支援の充実	
	(5) 思いの共有・新たなつながりの創出	
4	「つながる奥出雲」を実現するために	9
5	おわりに	10
資料	持続可能な町「つながる奥出雲」を目指して【イメージ図】	11

## 1 はじめに

激しく変動していく社会の中で、奥出雲町においても少子高齢化、人口減少による過疎化が進行しています。2040年には現在の人口の約39%が減少すると推計されています。こうした中で、社会教育委員会でも、各種研修会の報告、公民館との連絡会、各委員の実践報告の中で、持続可能な奥出雲町について再三話題になりました。

そこで、奥出雲町に育つ子供に期待するものは何か、その育ちを支える家庭、地域に期待するものは何か、少しずつ、実態を把握しながら、何らかの形にできないかと、社会教育委員、事務局が共通の願いを抱くようになり、提言書作成に取り組みました。

今、奥出雲町では、豊かな自然と人々のつながりに支えられ、安心でき、住み続けたいと未来に希望を持つことができる町づくりの実現をめざしています。そこで、社会教育委員の会では、持続可能な町づくりの柱を『人づくり・地域づくり』とし、それらを支えるのは「つながり」と捉え、『つながる奥出雲』をテーマとしました。

つながるとは、学校・家庭・地域が共に関係し合い、そのための貴重な学び合いの場があり、楽しくなる、成長できる、生活がより豊かになることだと考えました。こうしたつながりを意識した日々の取組を、地域住民や各種団体がつくり出していかなければなりません。

そのためには、奥出雲町の風土・歴史・文化を愛し、この町を育てる人間力を培うための、地域の多様な人材を巻き込む社会関係資本（ソーシャルキャピタル＝人と人との信頼し合えるつながり）の構築が必要です。こうした考えを基に本提言書を作成しました。

本提言が、今後の奥出雲町の世界教育行政と各地域の取組に資するものになることを期待します。

## 2 社会教育委員から見て、奥出雲町を持続する上で問題と感ずる状況

### (1) 子供の状況

- ・ きょうだい少なく、社会性が身につきにくい。
- ・ 子供の数の減少により、群れて遊ぶことが少ない。
- ・ ゲームなどをして屋内で過ごすことが多く、友達や自然と直接ふれあう機会が少ない。
- ・ 家での仕事を通して経験する様々な生活体験が不足している。
- ・ 基本的な生活習慣が身に付いていない面も見られる。
- ・ 放課後も児童クラブ等で過ごし、徒歩で帰宅することが少ない。
- ・ 移動手段が保護者の送迎頼りで、活動の機会や範囲が制限される。
- ・ 習い事、スポーツ少年団の活動などに参加する子供が多く、自由な時間が少ない。

### (2) 家庭の状況

- ・ 共働き家庭が多く、子供とふれあう時間が短い。
- ・ 子供が少なく、過保護になりがち。
- ・ 子供が家事を担うことが少ない。
- ・ 地区行事等への参加に偏りがある。
- ・ 子供の躾などについて、幼稚園、学校への依存度が高い。

### (3) 地域の状況

- ・ 核家族、独居家庭が増えたことにより、地域、近所とのつながりが薄くなりつつある。
- ・ 子供が参加できる地域行事が少なく、子供と地域住民がふれあう機会が減っている。
- ・ 地域行事の減少により、地域の担い手を育成する機会が失われている。
- ・ 様々な価値観が尊重され過ぎるあまり、意見や方向性がまとまりにくくなっている。
- ・ 高齢化、戸数減によって、集落の維持が困難になっている。

※上記のような状況について、価値観の多様化、二極化が進んできている。

### 3 持続可能な奥出雲町のために

少子高齢化が進み、中山間地域や離島を中心に地域の存続が危ぶまれる時代に突入しています。奥出雲町社会教育委員の会では、目指す地域像を「持続可能な町・つながる奥出雲」としました。

我々のふるさとを今後も維持し、残していくためには、奥出雲町で生まれた子供達が、大人になってもそのまま町内で暮らしていくこと、または、いったん町外に出てもまた戻ってきて町内で暮らしていくことが理想です。加えて、他の地域から奥出雲町へ移り、新たに町民になる人が増えることが望まれます。

しかし、進学や就職のことを考えるとすべての人が奥出雲町に留まることは難しいのが現状です。だからこそ、だれもが地域への愛着を持ち、人とのつながりを大切にしながら、地域に残る、残らないにかかわらず、みんながふるさとを守っていかなければならないと考えます。

そこで、これからの奥出雲町に求められる人材を、「心の中に奥出雲があり、つながり続ける人」とし、その具体的な姿について提言します。

#### 心の中に奥出雲があり、つながり続ける人

##### (1) つながりを大切にし、地域を担う大人

###### ① 地域のことに当事者意識を持って動ける

今後も町を維持していくためには、一部のリーダーや関係者だけで地域づくりの活動に取り組むのではなく、みんなが地域の担い手として動いていくことが必要です。行政にやってもらおうとか、誰かがやってくれるという意識では、地域力はどんどん弱くなってしまいます。

何が必要なのか、何をしたいのかを考え、出来ることから実践しようとする、当事者意識をもった人を育成していくことが求められます。

###### ② 周りを巻き込み、つなぐ

地域の存続は、個人や一部の人の力でできることではありません。せっかくのよい取組も、個人では活動の広がりには限界があり、継続していくことも容易ではありません。やはり集団・組織の力が必要です。手を挙げ、動き出そうとする人と共に活動したり後押ししたりすることができる人がいることで、活動は広がり、継続することができます。そのためには、

周りを巻き込んだりつないだりすることができる人、つまり、つながりを生み出せる人の存在が重要になってきます。

これからは、みんなでゴールに迫るために、同じ思いを持った人と連携・協働できる人を育成していくことが求められます。

### ③ どこに住んでも、奥出雲とのかかわりを持ち続ける

持続可能な地域づくりにおいて、貴重な人材が流出していくことは大きな問題です。しかし、様々な事情により町外で暮らすことは、現状では避けられないことでもあります。

ただし、出ていった人が奥出雲町をどう思うか、どうかかわるかによって、持続の可能性は変わってきます。ふるさと納税で奥出雲町に貢献しようとする人、近くで奥出雲の子供たちが参加する大会があれば応援に駆けつける人など、常に奥出雲を気にかけて、何かのきっかけがあればかかわりを持つ、そんな人を増やしていくことが望まれます。

## (2) 奥出雲町が大好きな子供

前述のように地域活動に対して当事者意識を持って取り組む前提となるのが、地域への愛着や誇り、残したいという強い思いであると考えます。地域に対する思いは、大人になって急に身につくものではなく、子供の頃からの積み重ねによって育まれていくものです。子供の頃からの様々な体験を通して、奥出雲町が大好きと思える子供に育てていくことが望まれます。

奥出雲町社会教育委員の会では、「奥出雲町が大好きな子」の具体的な姿として次の3つを挙げました。

### ① 奥出雲町に残りたいと思う

将来的には、現実的な問題でこの町を離れることも考えられます。しかし、日本各地へ、または世界へ羽ばたいていくためにも、その土台がしっかりとしていることが重要です。自分の居場所であるこの町が好き、ずっとこの町で過ごしたいと思える子供を育てて行くことが必要です。また、そのように思える環境、体験を与えることが大人の役割であると考えます。

### ② 奥出雲町の魅力を語れる

奥出雲町のよさを語ることは、そこでどのように成長してきたのか、自分の成長の足跡を語ることもあります。つまり、どこに住んだとしても、自分のふるさとを誇れることはその人の自信になると考えられます。そのためにも、成長に応じて奥出雲町のよさや課題に触れる経験を積み、課題を踏まえた奥出雲町の魅力について自分の言葉で語れるようすることが必要です。

### ③ 奥出雲町に貢献したいと思う

子供達が地域からしてもらっただけでなく、自分自身も地域をよくしたいという思いを持てるよう、自分からかかわっていく場をつくっていくことが必要だと考えます。地域の様々な問題点についても、改善すべき課題として前向き捉えられるような大人のかかわりが大事になってきます。

## つながりを生かした人づくりの推進

前述してきた「持続可能な奥出雲」を担う「心に奥出雲があり、つながり続ける人」を育成していくために、奥出雲町社会教育委員の会では、「つながる奥出雲」をテーマに以下のような取組が有効だと考えます。

### (1) 奥出雲のひと・もの・ことにふれる機会の充実

奥出雲町には、「魅力的な自然・歴史・文化」「人と人とのあたたかいつながり」があります。しかし、それらにふれる機会が少ないまま大人になっただとしたら、奥出雲町は生まれ育った町ではあっても、ふるさととして心に残り続けることは難しくなってしまいます。子供の頃から自分の住む地域や奥出雲町とのつながりを感じる場を持つことで、その人にとって「心の中に奥出雲があり、つながり続ける人」を育てることができるのです。

#### <奥出雲の魅力的な自然・歴史・文化をいかした活動>

##### 【たたら製鉄】

奥出雲、雲南地域で盛んに行われていた古代製鉄技法で、日本刀の材料である玉鋼は現在でもたたら製鉄でしか作れない。現在は全国で奥出雲町のみで操業がなされている。奥出雲町の景観、及び斐伊川下流域の独特な川の姿も、たたら製鉄の影響が大きい。

- 体験事例 町内全小学校の6年生によるたたら体験学習
- つなぐ団体等 日刀保たたら

##### 【仁多米づくり】

奥出雲を代表する農業資源。たたら製鉄における鉄穴流しで削られてできた棚田において、豊かな山林から流れ出る清流によって育まれる美味しいコシヒカリ。

- 体験事例 各小学校の5年生を中心に米作り体験
- つなぐ団体等 J A、各自治体の営農家及び営農団体、公民館

### 【スキー】

雪が降る地方ならではの冬の代表的なスポーツ町内に三井野原スキー場があり、冬の数少ない娯楽として、また、観光資源にもなっている。

- 体験事例 各小学校、中学校のスキー教室、ジュニアスキースクール等
- つなぐ団体等 三井野原スキー学校 等

### 【オオサンショウウオ】

特別天然記念物で、生息に適した環境が減ってきたため、準絶滅危惧種となっている。町内では、まだ数地区の河川で生息が確認されており、保護活動に取り組んでいる地域もある。

- 体験事例 横田小学校水辺の教室でサンショウウオの観察  
布勢小学校八代川探検で捕獲調査
- つなぐ団体等 六日市自治体（横田地区）で保護活動  
ゴビウス、各自治体、公民館

### 【炭焼き】

山に囲まれた奥出雲町の地理的特徴をいかした産業。貴重な燃料を生産するとともに森林の管理に役立っていた。たたら製鉄においてもなくてはならないもの。

- 体験事例 三成小学校4年生、高尾小学校3・4年生の炭焼き体験学習
- つなぐ団体等 やま子会（三成地区）、公民館

前述した「奥出雲のひと・こと・もの」を生かした体験は、活動そのものが貴重な体験となるだけでなく、それを守り、つないでくれる人とかかわることによって、さらにその価値を増すことができます。

子供の頃から「奥出雲のひと・もの・こと」を生かした体験を積み重ねることで、子供たちは、「奥出雲ならではの自然・文化・歴史」の魅力、「人と人とのつながりや助け合い」の大切さ、「社会の中で生きる力」などを学んでいきます。また、それぞれにかかわる大人から、「真剣な大人の姿勢」や、大人たちの「地域に対する思い」「子供に対する思い」を感じ取ることもできます。こうした大人とのふれあいが、奥出雲町で育ててもらった、成長したという実感を生み出します。それは、奥出雲町の中に自分の居場所を感じる安心感となり、地域の一員であるという自覚にもつながっていくと考えられます。

子供たちに「奥出雲町が大好き」という気持ちを育むために、「奥出雲のひと・もの・こと」を生かした体験をする機会をより充実させることが望まれます。

## (2) 住民同士が集う場の拡充

人と人との信頼し合えるつながりを築くためには、住民同士が顔を合わせ、声を掛け合える場があることが重要です。移動のほとんどが自家用車中心で、仕事帰りなどに立ち寄る場所も限られる中山間地域においては、住民が気軽に集う場が増えることが求められます。

高齢者対象のサロンはもちろん、若者が集う場、子育て世代の女性が集う場などを意図的に設定していくことで、集った者同士のつながりが生まれ、新たな社会関係資本（ソーシャルキャピタル）を構築することになります。

また、年齢を越えた住民同士が集う場は、地域への所属感、愛着心を育む場になります。特に、若者や子供たちが、お客さんとしてではなくそれぞれに応じた役割が与えられ、大人と一緒に活動できるような場があると、自己有用感が高まり、地域とのつながりをより強く実感できる場になると考えます。

## (3) 「参加・協力」から「参画・協働」への転換

みんなが地域の担い手になるためには、地域の諸活動を、「参加・協力」から「参画・協働」へという視点で見直す必要があります。

これまでは、公民館など運営者だけで企画運営し、住民はお客さんとして参加するという事業が多かったと思われます。会議は開かれるが、運営側のやりたいこと、やらなければならないと考えていることを原案とし、それについての可否を審議するだけでは、ほとんどの人は意見を述べることなく終わってしまいます。それでは住民の当事者意識は生まれません。

せっかく集まったのだから、住民が必要としていること、やりたいと思っていることを出し合い、思いや目的を共有した上で、出来そうなことから形にするような事業展開が求められます。それにより、より多くの住民にお客さんではなく運営側として携わってもらえるようになり、地域住民の当事者意識を醸成することができます。

ここで大事ななのは、効率的な会議や事業展開をすることよりも、住民が動き出すきっかけをつくることです。いろいろな意見、考えの中から、よいところをつないでひとつの方向性をつくり出すことで、誰かのやりたいことではなく、みんなのやりたいことになります。住民のやりたいこと、必要と思

っていることを活躍場面として盛り込むことで、当事者意識を持ち、地域活動に参画・協働する人が育つと考えます。

#### (4) 家庭教育支援の充実

奥出雲が大好きな子供を育てようとするとき、大きな影響を持っているのが親や大人のかかわりです。せっかく子供たちが様々な体験をして地域のかかわりを持って、大人が「どうせ奥出雲町は、、、」とか「こんな町は出て都会で活躍して」といった言葉をかけてしまうと、子供たちは奥出雲町を好きになれないどころかマイナスイメージを持ってしまいます。自分の生まれ育った町を肯定的に捉えられないことは、拠り所の一つを失うことにもなります。

大人として、奥出雲町のよいところを伝えたり、マイナス部分をどうすればよいかを子供と一緒に話し合ったりして、ふるさとを肯定的に捉えられるようなかかわりをするのが望まれます。そのためには、子供たちを学校や家庭だけで育てるのではなく、地域の未来を担う人材として地域全体で育てていくことが効果的であると考えます。親や先生だけでなく、様々な人とながらることで多様な価値観にふれることができます。また、地域の人から大切にされ、守り育てられる経験は、その地域への愛着となり、奥出雲とつながり続けようとする心情を育むことにもつながります。

親子でふるさとについて話すためには共通の話題が必要です。つまり、親子の会話につながる共通体験を増やすことが求められます。しかし、忙しい今の親にとって、様々な体験の場をつくり出すことは時間的にも難しいというのが現状です。公民館など様々な場において、子供たちを対象とした活動が行われていますが、親子で参加できる活動を増やすことが望まれます。

#### (5) 思いの共有・新たなつながりの創出

持続可能な地域づくりを推進するためには、社会関係資本の創出が必要不可欠です。

奥出雲町に暮らす人には、強弱の違いはあれども、「自分の地域が好き、奥出雲町を残したい」という思いがあるはずです。しかし、そういった思いを表に出すことは、ほとんどの人はあまりしていないように感じます。その思いを引き出し、同じような思いを持っていることを確認し合えたら、地域へのかかわり、具体的な行動につながってきます。まず、住民同士で思いを共有する場をつくる必要があります。

また、今ある活動や動き出している人を、他者や他の活動と結びつけることで、新たな動きを生み出すことができます。こうしてできた新たなつながりが地域を担う人を育てていきます。社会教育の力を生かし、つないでいくことが有効であると考えます。

さらには、共有した思いや繋がって活動する様子について、新聞、広報、ケーブルテレビなどのメディアを活用し、広く発信していくことも重要です。広く周知することで、その場になかった人も巻き込み、地域全体で思いや活動を共有することで「つながる奥出雲」に近づけることができます。

#### 4 「つながる奥出雲」を実現するために

- ① 「たたら」や「仁多米」など奥出雲ならではの教育資源を活用した体験活動を、幼・小・中・高それぞれの発達段階に応じて系統的に実施にする。
- ② スキー場のある町としての利点を実感できるよう、幼少期からスキーに親しむ機会を充実させるとともに、高校卒業までにスキー検定〇級取得など、具体的な資格取得にもつなげる。
- ③ ふるさと教育の充実に加え、奥出雲町に関心を持ち、自分で学んだり自分からかかわったりする意欲を高めるため、奥出雲町検定を実施する。
- ④ よいことはみんなで褒め、悪いことはみんなで叱ったり教えたりする風土を作るため、地域で育てたい力や態度を共有する場を持つ。
- ⑤ 地域の方から親子と一緒に盆踊りを教わる練習会など、子供だけでなく、親子で地域にかかわるきっかけとなる活動を実施する。
- ⑥ 親世代、祖父母世代が子供の頃にやっていた遊びを親子で楽しむ交流会など、群れて遊んだりあるものを工夫して楽しんだりする機会を提供する。
- ⑦ 戸主だけでなく家族全員で参加する食事会など、地域の一員としての実感を持てる機会を充実する。
- ⑧ 文化祭のテーマやそれをふまえた内容などをワークショップなど参加型学習の手法を用いて協議するなど、地域活動の企画・実施に様々な世代の住民を巻き込む。

## 5 おわりに

この度、「持続可能なまち“つながる奥出雲”を目指して」～人と人、人と地域のつながりによるひとづくり～の提言書を取りまとめました。

奥出雲に育つ子どもに期待するものは何か、その育ちを支える家庭、地域に期待するものは何かと、実態を把握しながら「人づくり・地域づくり」を論じてきました。

自然の豊かさ、大地の恵み、歴史や文化遺産を誇りとして「愛するふるさと」の継承・発展に「わがこと・丸ごと」連携・協働し「提言書」の実現に向け邁進することを念願いたします。

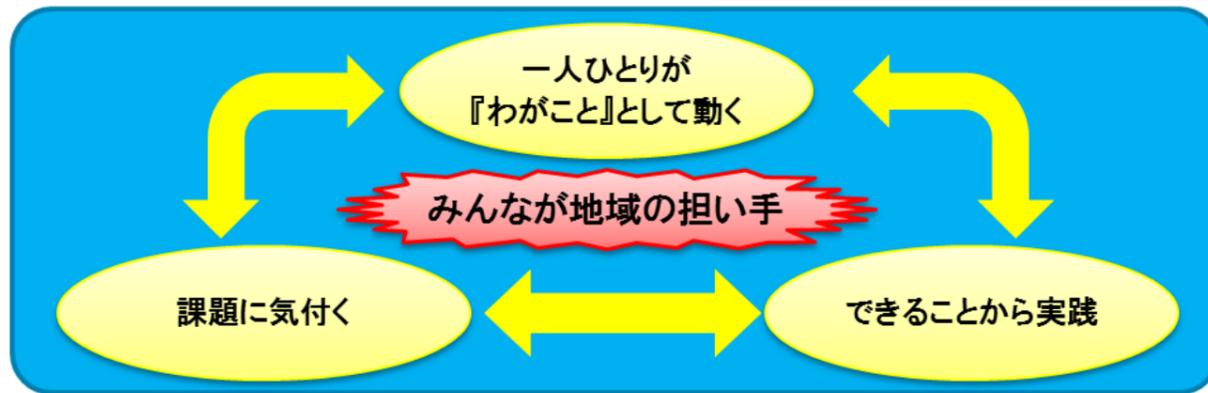


【イメージ図】

持続可能な奥出雲町

つながる奥出雲

心の中に「奥出雲」がありつながり続ける人



住民の当事者意識を高めるために

集って、何をすべきか、何ができるか、何がしたいかを語り合う。思いやねらいを共有し、活動につなげる。

答えは参加者が決める      互いの思いを出し合う

我が事      主体的に動く  
互いに話す      つながる

原案の可否を審議する会で、一部の意見を聞いたなら、これでよろしいか？で意見がまとまる

はじめから答えが決まっている      ほとんどの人はしゃべらない

他人事      人は動かない  
個々が話す      つながらない

運営側のやりたいことをするのではなく、住民が必要としていること、やりたいことをする事業に。  
いろいろな意見、考えの中から、良いところをつないで、1つの方向性を作っていくことで、だれかのやりたいことではなく、みんなのやりたいことに。  
効率的な会をすることが目的ではなく、住民が動き出すきっかけを作ること。

社会教育の活動を通して背中を押す

- (1) 奥出雲のひと・もの・ことにふれる機会の充実
- (2) 住民同士が集う場の拡充
- (3) 「参加」から「参画」への転換
- (4) 家庭教育支援の充実
- (5) 新たなつながりの創出

地域の小さな取組から社会を変えていく

奥出雲ならではの  
「魅力的な自然・歴史・文化」 「人と人のつながり」 を生かして

- たくさんの体験をする(満足感)
- 成長した・育ててもらった実感がある(感謝)
- 奥出雲の一員という自覚がある(所属感)
- 自分の居場所がある(安心感)

どこで  
学校・家庭・地域で  
※WIN&WINの関係を大事に

どんな体験を  
＜自然＞山、星、植物、生き物、川、温泉など  
＜歴史＞武将、城、神話、たたらなど  
＜産業＞そば、牛、米、酒、炭焼きなど  
＜スポーツ＞スキー、ホッケー、陸上、剣道など

何を学ぶか  
○自然・歴史・文化の魅力  
○人と人のつながり・助け合い  
○社会の中で生きる力  
(人間として育てる)  
・真剣な大人の姿勢  
・地域に対する思い  
・子どもに対する思い

家庭・地域で

大人から子供につなぐ

奥出雲のよいところを伝える  
戻ってきたくなる条件、環境を整える  
子どもが本気で取り組める環境を作る



奥出雲町社会教育委員の会  
(平成 29 年度～30 年度)

会 長	田中 靖子
副会長	山本 勝昭
委 員	吉田みさ子
委 員	落合 俊夫
委 員	佐伯 君雄
委 員	飯國 淳子
委 員	小川 直美 (平成 29 年度)
委 員	立石 典夫 (平成 30 年度)
委 員	松田 武彦 (平成 29 年度)
委 員	飯塚藤兵衛 (平成 30 年度)
委 員	藤原 和紀 (平成 29 年度)
委 員	糸原 佳幸 (平成 30 年度)

事務局 奥出雲町教育委員会教育魅力課  
社会教育主事 古澤 俊司